

跡追い、影踏み鬼は白に染まる。

1mm

そして。

終わりは唐突に訪れた。

ざあ、と。

一歩踏み出した途端、ずっと白い白いままに抜け出せなかった霧が、開けるように一気に引いた。いきなり別の世界に抜け出したかのように。

目前に広がったのは、どこまでもどこまでも、美しい、紺碧。

眩しさに細めた目で見据える。

ああ。ようやく。

同じ、だった。

確信する。

此処がきつと、彼女の「最果て」。

\*

[跡追い、影踏み鬼は白に染まる。]

真白い部屋の一番奥、窓の下に、飾ってある絵があった。ここに移り住んだ最初の日からずっと、その白い光の下を居場所と定められて。

一面に広がる、鮮やかな、紺碧。空さえも白く思えるような、不思議に深いあお。

彼女が、「最果て」と呼び懐かしんでいた場所。

そ、と縁に触れる。触れたのは、これが初めてだった。彼女が、あまりにも眩しそうに見ていたから。彼女が、最初に此処に飾って以来、自分の前では触れようとしなかったから。

彼女がそうなのだから、自分は、まじまじと見ることすら憚られるような気がして、触れようとなんて思えなかった。思っていなかった。こうなるまで。

……こうなると、思っていなかった。

絵の中の全ての表情を覚えるために、じっと見つめる。彼女がこの場所に見ていたこと、彼女が残してきた思い、抱いていた願い。

彼女の「最果て」に辿り着いた時に、ひと目で此処だと気付く為に。

\*

彼女とこの地に暮らし始めたのは、まだ、幼かったと言える頃。年齢にしても内面にしても。彼女がまだ成人しておらず、自分も社会を知り始めたばかりの頃だ。

初めて会ったのは、この街だった。彼女が、「最果て」と呼ぶその地から出てきて、ここに拠点を定めようかと迷い。自分も同じく、故郷から出てきて、この街に馴染み始めた時。

彼女はその頃、絵を描いて毎日を生きていた。時に子どもたちに囲まれながら楽しそうに。時に疲労した人を慰める為に静かに。時に老夫婦の話当真摯に聞きながら涙し。

そうして、人々に愛されていた彼女は、自分と一緒にこの地に住むようになってからは、絵を描くより主に画材を取り扱うようになった。

彼女の絵を望んでくれた人々に、それでも「自分を支えてくれた皆が絵を描く手伝いを、逆に自分が出来て、楽しい」のだと、笑って。

裏に抱えた、一番の理由であった病のことは、最後まで自分以外の誰にも明かさなないまま。

最期の日。

寝言のような小さな声で彼女が零したのは、どうしようもなく、間に合わない願いごとだった。

……ほんとはね、

「さいごは、」

「あの絵の中に、眠りたかったの。」

おいていって、ごめんね。

その言葉で初めて、彼女が抱いていた、「最果て」への正しい想いを知った。

「おいていってごめんね」。

自分を。

あの場所を。

彼女が言葉を発したのは、それが最後。最初で、最後。

ああ。だから。

彼女を、「最果て」へ連れていこうと、決めた。彼女を、彼女が望んだ場所へ還すために。

\*

彼女の「最果て」を、いつも遠目に見ている人がいたのを、覚えていた。

目を細めて、穏やかな笑みを浮かべて。紛れもなくそれは、描かれたその地を懐かしんでいる表情だったから。

赤味を帯びた髪と肌、気安そうな颯爽とした雰囲気。彼女と同じではなかったけれど、「最果て」を臨める場所にいた人なのだろうと、分かった。

彼女を見送り、全ての物事を片付けた後。  
その人を訪ねた。彼女の「最果て」に行くために。

その人は嬉しそうに応じ、「最果て」について語ってくれた。「最果て」のこと、旅路のこと、「最果て」のことではなくても知っておくと役立つかもしれないこと。

その人の話で、初めて「最果て」の俗称を知った。けれど、「うみ」というその名は、あの深い深いあおに馴染まないように感じられて、結局自分では「最果て」と呼んだ。

旅立つための支度も手伝ってくれて、見送りにも立ってくれた。

どうしてここまで、と尋ねると、その人は心底嬉しそうに笑って。

「懐かしむ機会をくれて、ありがとう」

あそこは、本当に、美しいところだから。本当に本当に、美しいところだから。どんな理由でも、想ってくれる人がいてくれて、嬉しい。

自分の方が言い足りないくらいなのに、それでも、ありがとうを何度も重ねて。

そうして。自分は、「最果て」へと旅立った。

淡々と。淡々と。

ただ、淡々と。

いつしか、自分も、日々の流れを失ってしまったかのよう  
うに。

(ああ、)

世界は、白いな、と。

彼女のあおを思い浮かべる度のその気持ちだけ、やけに  
鮮明に。

\*

そうして。

そして。

\*

そして。

終わりは唐突に訪れた。

\*

どこまでも深く深く、広く広く。

気圧された。

ああ。と。

ただ、ああ、と。感嘆とはこういうことなのだと思った。  
彼女が描いていた「最果て」。美しい色。勿論、美しかったのだ、彼女の絵は。

しかし、目の前に広がったこのいろは、ああ、

(焦がれるはずだ、)

想わずには、いられない、いろだった。

立ち竦んでいた。ただただ、見つめて。

見つめて。

見つめて。

見つめて。

ようやく、細くも、嘆息して。

あおの間近にまで歩む。真下に見下ろせるところまで。

かたり。大事に持ってきた宝箱を、丁寧に下ろし、極彩の綾紐をゆっくりとほどく。音を立てずに蓋を持ち上げれば、中に収まっているのは、小さな白磁の壺。そっと触れて、少しの間、慈しんで。取り出し、胸に抱える。

僅か、目を閉じて。

(……ああ、)

不意に。もう、何もかも終わってしまったのだ、と。微かに笑む。

彼女を、辿り着いた彼女の「最果て」に還す。それが最終目的だった。そのつもりだった。箱の中で眠る彼女を、解き放って。

ねえ、ああ、でも。

そうして。そうして、自分は、どうすればいいのだろう。彼女の幕が下りた時点で、自分ももう、一緒に立ち止まってしまっているというのに。

彼女がいないこの先など、ない。もう、彼女と一緒に、

自分も終わってしまっていたのだ。

(いつだったか。彼女は言った。いつか一緒に「最果て」  
にいきたいね、と。)

見つめる。彼女の思い描いていた青とは、きっと、ずっと、この美しいあおだったのだろう。

(叶うのが遅くなってしまったけれど。君の身体はなくな  
ってしまったけれど。)

踏み出す。長く歩いてきたけれど、きっと、一步も踏み  
出せていなかったのだ。ようやく旅立つような心境で。

目蓋を閉じる。

同時に、全ての幕をも。

深い深いあおに、白い水波。

彼女の最果てが、孤独ではなくなった喝采の音。

そして、白は紺碧へと落ち逝く。

\*

2677字。